

提出日 2017 年 12 月 21 日

2017 年度 琉球弧研究支援 報告書

研究テーマ「 離島における「地域と子育て」の現状 」

氏名:仲真みき

所属学部学科:人文学部こども文化学科

I. 初めに

私は、もともと離島での生活に興味があった。離島では地域ぐるみで子育てをしている地域があると聞いていたのでどこかいいフィールドはないかと探していたところ、担当教授から奄美大島での調査を勧められた。

II. 研究の目的、動機

奄美大島の中でも特に地域と子育ての参考になるような集落を探していたところ、大和村役場職員である和泉和香さんに、奄美大島大和村名音集落の取り組みが魅力的であることを紹介していただいた。

III. 研究方法、地域、期間

研究方法 奄美大島大和村名音集落で地元の方に聞き取り調査を行う

地域 奄美大島大和村名音集落

期間 2017 年 9 月 24～26 日

IV. 結果

名音集落の住民が運営する「のんティダの会」メンバーであり、小学校で週 2 回支援員を務めている重野弘乃さんからお話を伺った。

・のんティダの会について

「のん」は「名音」が訛ったもの。

2011 年、村が策定した地域福祉計画の一環として、地元住民が主体となって、集落で支援を必要とする住民を把握するための集落マップづくりを行った。名音集落は高齢化率が高く、高齢者の孤立防止に「気軽に集まることのできる場所ができれば」という思いから、2012 年の冬、集落の数名が中心となり取り組みをスタートしたそう。1 年目のみ県から補助金をもらい、運営。その後も集落のメンバーで協力しながら活動を続けてきた。

2017年9月現在、ティダの会メンバーの平均年齢は80歳。男性3名、女性14名の計17名で構成されている。

会のモットーは「できる人が、できるときに、できることをする」。それぞれができる範囲で、自分の役割をもって楽しく活動ができる。持続力のある組織をつくっていくための重要なポイントだと感じた。

・のんティダの会 笑談所

名音集落には、のんティダの会が運営しているサロン「のんティダの会 笑談所（しょうだんじょ）」という物置小屋を改装した建物がある。地域の憩いの場、住民同士の情報交換の場として大切にされている。この場所でお酒を飲みながら、住民がもっているアイデアや取り組みたいことを話し合い、様々な取り組みが実行されているという。

月に1度、土曜日に笑談所で授業を行う。グランドゴルフや地域の方々を招いての総合学習が多いそうだ。

この場所を中心として、こどもからお年寄りまで、年齢を超えた地域のつながりが生まれている。

こどもたちは笑談所で行われる島唄・三味線教室へ参加したり、おやつを食べに来たりする。また、老人たちが知っている名音集落の昔話をもとに小学生が紙芝居をつくり、披露した。

名音小学校で行われる運動会は年齢を問わずたくさんの地域住民が参加し、まるで地域の運動会のよう。

・名音集落到こどもが多い理由

名音小学校児童数 約20人

就学前のこども 20人以上

名音集落は高齢化率が高い地域であるが、少子化の進行は比較的遅い。近年こどもの数、特に就学前のこどもが増えているという。「子育ては島で行いたい」という思いからUターン、Iターンしてくる若い世代が増えているからだ。地域がこどもを育ててくれるという安心感、心強さが島にあるのだろう。

また、Uターンする若者は高校まで島で過ごした者が多い。その理由として、「地域の行事運営や地域住民との交流などの思い出が15歳で島立ちをした子に比べてたくさんあるから、島から出るとそれが懐かしくなる。自分がこども時代を過ごしたこの島にもどってこどもを育てたいと帰ってくるのだと思います。」と重野さんは言っていた。

保育所には西洋人とのハーフのこどもが2人いた。話す単語は英語発音で、こちらが話す言葉は十分に伝わっていなかった。しかし、だからといって他のこどもとわかる様子もなく、島の子のひとりとして地域が受け入れる雰囲気があった。

V. 考察、分析

名音地区で地域による子育てができている要因（考察）

1. 「地域のこども」という意識が強い

地域にいるこどもは、地域みんなで育てるという考え方がるように感じた。

2. 年齢を超えた地域のつながりがある

のんティダの会をコミュニティの中心として、老人会、壮年団、婦人会、青年団、こども会の幅広い世代が交流する機会がある。

3. 老人の活動をうまく子育てに結び付けている

ティダの会 笑談所での島唄・三味線教室などをはじめとして、老人とこどもとの交流や地域のこどもたちの学びの場となっている。

VI. 今後の展望

来年も奄美大島へ足を運び、引き続き名音集落や他の集落で調査をしていきたい。また、県内にある他の離島でも調査をし、地域ごとの特色や違いがあるか比較していきたい。

VII. 終わりに

離島への興味から始まった調査だったが、島の方々の郷土愛を感じることができた。少子高齢化が特に問題視されている離島地域であるが、その対策への原動力は郷土愛、「自分たちの地域を自分たちの力で盛り上げていこう」という熱く前向きな姿勢だった。

VIII. 参考文献、調査協力

名音集落「のんティダの会」重野弘乃さん

大和村役場職員 和泉和香さん

名音保育所の園児、保育士の方々

IX. 指導教員コメント

はじめて社会調査というものを体験し、一生懸命に聞き取り調査をし、それをまとめるのは結構骨の折れる作業であり、大変だったと思います。しかし、離島への興味が強いので、楽しい体験でもあり、とても成長したのではないのでしょうか。奄美の地域の人たちの自分の郷土に対する思いの強さを経験できたことは、これからの財産になることでしょう。

今後も、離島への興味を持ち、たくさんの離島を訪れ、たくさんの人たちから話を聞いてほしいと思います。今後の活躍を期待しております。